

# 人間の土地

上巻

竹内泰宏



竹内泰宏

人間の土地

上巻



河出書房新社

# 人間の土地 上巻

初版印刷 昭和五十一年十一月十五日

初版発行 昭和五十一年十一月二十日

著者 竹内泰宏

著者略歴 一九三〇年東京に生れる。東京大学  
経済学部卒。一九六八年、長篇小説「希望の砦」  
で河出長篇小説賞を受賞。著書に小説「見張り」  
（文芸賞作品集・河出書房新社）のほか、評論  
「視点と非存在」（現代思潮社）、「想像的空間」  
（せりか書房）、「境界線の文学論」（河出書房新  
社）、「アジアのなかの日本文学」（筑摩書房）  
など。現在日本A A作家会議会員。

装幀者 阪本文男

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五  
電話東京三五局五三二一（大代表） 振替東京〇一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 中西製本印刷株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

上巻 目次

第一部

第一章 城趾 5

第二章 冬の囿り 51

第三章 映子の部屋 133

第二部

第四章 卑の国の馬 191

第五章 「裏祭り」の夜 249

第六章 塔ノ沢新造 267



人間の土地  
上巻



# 第一部

## 第一章 城趾

### 1

立ち並ぶ針葉樹の幹のあいだから射しこむ傾いた日射しが、まだらな影を沢の斜面を蔽う熊笹の葉の上に落していた。日の光はわずかずつ量を減らし、かすかに夕暮れの気配の漂いはじめた熊笹の下に隠れて見失いそうな小径を歩く二人の足音が、沢の急な斜面をとぎれがちにたどっていた。須山の前を歩く映子の踏みつける足の下で地表につまった腐った葉が乾いた音をたて、笹の葉が夕日につらぬかれて静脈の浮きだした彼女の鮮やかに白い脚の皮膚を細かく切りつけている。

不意にしなやかな鞭に似た下枝が、映子のかきわけた灌木の茂みから空を切ってとんできて須山の頬を打った。そのとたん彼女の腕が須山にしがみついていた。はずみでかれは二三歩よろめいたが、彼女の身体はコートの下の方の骨の重みがじかに感じられるほど身近だった。

「蛇じゃない？」長い登り坂を歩き続けてきたために荒くなった呼吸の下で映子が言った。

「蛇じゃないよ、松だよ」須山はすぐ足許の笹の葉が乾いた音をたて、褐色の塊りがのびたり縮んだ



りしながら葉のあいだを転るように遠のいていき、七八メートル先の苔の生えた岩の根もとから鎌首をもたげた蛇のように生え出している松の曲った幹の下に走りこんでいくのを見て言った。だが、そのあいだも映子はかれの腕にすがりつき、からませた指の先でかれの手を強く締めつけていた。「痛いよ……」須山は女の指の異常に強い力からのがれようと掌の力をぬいたが、彼女の指はもっと強いかれの指にからみついてきた。

頭上のどこかで鋭い鳥の鳴き声がして木立のあいだの空気を引き裂いたが、その姿は密生した樹々の枝葉にかくれて見えなかった。ふたたび静まりかえったあたりには、檜の葉や幹から落ちてくる収斂味のある匂いがたちこめていて須山の鼻孔を刺戟していた。

「どこへ行ったんだろう、あの運転手？ こっちが近道だなんて教えておいて、ひどい道だな……」須山は一足先に熊笹を踏みわけて進んでいった案内の運転手が残したかすかな跡を見つけたそうと、行手の勾配を視線でたどりながら言った。三十分ほど前、尾根沿いの小径の切れ目で、こっちが近道ですよと言って二人を誘って沢へはいりこんだあと、ちょっと先へ行って道の様子を見てくると言っただきり、だぶだぶの紺サージの服を着たタクシーの運転手の後姿は熊笹のあいだに吸いこまれたようにたちまち消えてしまったのだ。

「もう先に着いているのかもしれないわよ」からめた指の力をゆるめながら映子が言った。

「あの運転手も道がわからなくなっただんじじゃないのかな」須山は弾む息の下で言った。

「だって、ほかの運転手だったらとてもあの城趾へは案内できないなんて言っていたのよ」

「たしかにこれじゃ、街のどんな運転手だって、そう簡単には案内できないだろうね。去年もあの城趾へ行きたいというお客がいたけど、案内した運転手も途中で道に迷っちゃったって、あの男もさつき言っていたじゃないか……」

「あの人、あれはほかの運転手のことみたいに話していたけど、ほんとに自分のことだったんじゃない

いのかしら？」疑わしそうに映子が言った。……いま須山の手を握った彼女の意外に強い指の力が、まだかれの掌に残っていた。かれはその手が汗ばんだ妻のふみ子の皮膚の上を滑って、彼女の身体からみつく光景を想いえがいた。すると須山は寄りそったかたわらの映子の身体が不意に骨格と体重だけを残して自分から遠ざかり、風が吹きこむように二人のあいだにあるものが冷えて、かれは映子をしりぞけている自分を感じる。

「どうして駅前で、自動車の鍵キをかけておかなかったんだい？ あの城のことを書いたのがなくなる  
と、ちょっと困るな……」

「あれは東京へ帰ってから探せば、コビイがみつかると思うわ」

やっぱり最初から考えていたように、この街に着いたらタクシーでもなんでも頼んで、すぐにこの城趾のある山へくればよかったんだ。それを映子がなまじっか運転免許証なんか持つるために、レンタカーなんて考えだしてよけいな手間を——あげくのはては、高原の駅前にほんのわずかのあいだ駐車している暇に座席に置いておいた大切な資料まで盗まれて……。実際、映子が高原の隣の駅から借りてきたレンタカーは山のなかの地図にも載っていない城趾を探すのに役立たなかったばかりか、大切な城のことを書いた資料さえ、駅前の店で食事していたわずかの時間にだれかに盗まれてしまったのだった。

「だけど驚いたな、ちょっと車を止めといたあいだに盗られちゃうなんて……だいたいな記録なのにさ。それに変だよ、きみのバッグの中身や現金にはまるで手をつけなくて、あれだけを盗んでいくなんてさ。まるでぼくらが行こうとするところを知っていて、それを邪魔しようとしているみたい  
に……」

映子は答えなかった。彼女は青いコートを着ていたが、その片方の肩がかれの言葉に抵抗するよう  
にまるく高くなった。須山は片方の手に昨日買った鎌を持っていたが、刃の部分をボール紙で包んだ

鎌が邪魔で、別の手に持ちなおすと云った。

「すこし無理だったのかな。武田方が豊臣勢に追われたといえば、四百年も前だろう？　そこへきて、城趾だの墓だのを探そうなんてのが……もうすこしはつきりあてをつくってからくれれば……」

「あなたはどうかなの？　あたしよりあてもなくきたんじゃないか？　乾いた声で映子が言った。

「いや、あてはあったさ。ぼくはこの土地をよく見て、そして交渉すりゃいいんだ。これはぼくの仕事だってことはきみも知ってるじゃないか。……だけど、ぼくが訊いてるのは城趾のとき。きみがなぜここへきたかってことだよ」

「こさせたがったのはあなたじゃないの？　それに、なぜってことがいつもわかると思って？　それがわかってることなんか、もうやる必要もないほど自分でもわかっていることだと思わ。あたしがきたのはわからないからよ、なぜここへきたいのかも、わからないからよ……」

そうじゃないよ。きみにはわかっているさ。なぜきたか、わかっているさ……須山は口のなかで言ったが、城趾へ行こうと言いだしたのはあなたの方よとかれをなじっている映子の声が、膝頭からみつく熊笹の枝葉をかきわけている彼女の黙りこくった後姿から聞えてくるかのようだ。

城趾へいってみるだけよ、か。確かに口で言うのも考えてみるものでもないことだったが、いざ実際にやってみるとなると駅のある街の外れから山下まで五キロ以上もあって、しかもどこから登ったらいいかわからない城趾のあるこの一倉山の登り口を知るためには、せっかくのレンタカーも駅前に置き去りにして、一倉城の城趾のある場所を知っていると街のタクシー運転手を探しだして案内してもらおうほかなかったのだ。しかも城のある山頂にたどりつくためにはそのタクシーも山の下で降り、笹藪を踏みわけ、雑草の生い茂る急角度の山径や近道だという沢づたいの道を、一時間以上も徒歩で登ってくるほかなかったのである。

「あれを見て。沼があるわ」

映子の声に、須山は足許にいつの間にかひらいた沢の下の斜面が落ちあつた場所に視線を投げかけた。紡錘型の小さな窪地の底、向う側の斜面に生える杉林が無数の幹を黒い杭のように並べている下のそこだけ黄色く葉むら全体が透けて見える陽だまりのかたわらに、湿った土地と葎やすすきの茎のあいだから湧き出している小さな沼があつた。沼はならやくぬぎの雑木に周囲をとりまかれていたが、二人が歩くにつれて幹のあいだからのぞけるきらきら輝く鏡のような水面からは、ところどころ枯れて褐色をおびた葎が生え出していて、水際には一本の柳に似た頭でっかちの木が重そうながい葉の先端を水面すれすれにもたれかけ、うなだれた人間のような姿で立ちすくんでいるのが見下ろせた。

「こんなところに沼があるとは思わなかつたな……」

須山は足を止め、水面に吸いこまれるような気分に見舞われながら、湿った窪地を見下ろしていた。山のかなり高い位置に横たわっているその沼が、自然に湧き出したものか、それとも山の湧き水を溜めるために古い昔に人手によって掘られたものかわからなかつた。だがかれは心の底の不安のようなもの、それまで自分を囲んでいた葉裏をきらめかせる熊笹のそよぎや、どこから流れてくる風の動きを不意にびたりと止めたその沼地の一带に凝集し、静かで透명한空白がまるでこれまで生きてきたかれの人生の夢想のうちに拡がっていた曇り空をその一点に集めたかのように、かすかな心臓の鼓動を呼びおこすのを感じていた。

頭上のどこかでふたたびコジュケーに似た鳥のかん高い鳴き声がして、水面に反射し、消えた。あととはもとのように静まりかえり、陰湿な光をおびた沼地に生え出た葎の下葉や、羊歯しだの下葉をつたつてしたたり落ちる目に見えない雫のあいまから、まだらに射しこむ夕陽に寝ぐらを襲われた地虫たちの呻きとも叫びともつかない鳴き声が断続的に聞えてきて下の窪地全体を満たし、地表すれすれに漂う夕闇と重なりあつていた。須山にはふとそれが、人間たちが忘れ去り、見失つてきた動物たちの湿った棲処、明日の日射しをさえぎられている者たちの秘かな呻きのように感じられた。沼は、生と死

のあいだになんの境界もない、生命の片鱗さえも窒息させようとしているかにもえる沈黙をのみこんで静まりかえっている。冷えはじめた大気は長い登りの息切れを休めるためにしばらく足を止めた須山の視線の下の水面を靄に似た光のなかにひきずりだしてはいたが、須山のやってきた遠い都会とこの場所を距てる長い距離も、この土地へやってきてから過したわずかな時間も、この沼地を蔽っている長い時のよどみにくれば無いにひとしく、沼は時をその底に沈める深い淵のようだった。……すると須山の眼に映子とはじめて夜を過したときの、紫色と白の縞のカーテンで閉された蒼白い光の漂う彼女の部屋の光景がよみがえり、この何ヶ月かの彼女とふみ子のあいだにはさまれたおしつめられたような毎日が、息苦しく思いだされてくる。須山は自分のかたわらに黙りこくって歩いている映子の身体をふたたび感じていた。

やがて二人は沼を後にしてほとんど沢を登りきり、熊笹の切れめに立っていた。そこは二つの尾根にはさまれた彎曲した崖沿いの小径で、雑木のあいだからのぞく前後の山の稜線の動きがなんとか方角の見当をつけさせる場所だった。

「見えたわ」後からきた映子が言った。

須山は開けた視界に視線を投げ、小径の行手をたどったが、運転手の姿は見あたらなかった。「だれもいやしないじゃないか」

「城趾よ。あれがそうだとやっているのよ」

映子の指さす先、沢を距てて四五百メートルほど先の空の下に張りだしている木立に蔽われた尾根のまだ日の当たっている先端に、木立のあいだから三角形に突き出している黒い石垣らしいものが見えていた。石垣の一面は西日を浴びて磨いた黒鉛のように赤味をおびて輝き、石壘に似た石垣全体は黒くろとした輪廓を遠く小さく、夕空のなかに浮かびあがらせていた。尾根から空中にせり出した艦首のようなその石垣が、めざす一倉城の城趾の一部であることは間違いない。《とうとうきたな……》

須山は思はず息を吸いこみながら、まだ遠い山上にその一部を見せた城の石垣をじっと見た。沢に距てられ、尾根の樹木と山腹の緑の稜線のただなかに異質の形をあらわしている山肌に喰いこんだ黒い石垣は、荒涼として樹木をつくる虚ろな騒めきにとりまかれ、長いあいだ忘れ去られたまま周囲のすべてから隔離されている感じだった。いま須山の立っている場所からそこまでは、沢を跳び越えた直線距離で行っても、かなりの距離があるだろう。

「まだ三十分はかかるだろうね。この沢をのぼって、あの尾根づたいに歩かなきゃならないんだから」  
城趾は、もはや黙りこくって歩きつづける二人の荒い呼吸と足音が斜面沿いにゆるく曲るたびに前後に移動し、這松や檜の葉のかけに隠れ、またあらわれた。もう沢の上端に近く、這松のほかは熊笹も深い木立もない山腹に、大気は漂いはじめた夕靄のなかにも粘っこい新芽の輝きで生きいきした精気を浸みだしていた。須山がふり返ると、いましがた登ってきたばかりの沢の凸凹のある熊笹の斜面や、沼のある林が、杉や檜の針葉樹の穂先や椎や檜かしの常緑樹の暗い葉先をつくる複雑な影のなかにその輪廓を融かしはじめていて、山の日蔭にすでに忍び寄っている薄明のなかに一秒ごとにもみこまれ

ていき、やがて襲う山峡の深い闇の底に沈んでいこうとするのが感じとれた。  
そのとき須山は、行手の沢を登りきった場所の小さい這松の脇にしゃがみこんでいる紺サージの服を着た男の姿を見た。先に行った運転手だった。丸い帽子をあみだにかぶり、縮かんだ小さな顔で運転手は登ってくる二人の方を見下ろしていた。

「こっちへいけばすぐに城趾ですよ」

須山と映子が近づくと、待ちかまえていたように運転手が声をかけた。帽子の庇の下の皮膚の干からびた小さな顔のなかから、ずぶといが臆病そうな眼が須山を見ていた。五十そこそこですでに年寄りじみだたその顔には労働で疲れているのに妙にしぶといところのある、山地の農夫に似た印象があった。

「近道をしたら、かえって骨折ったよ」喘ぐ呼吸を肩先でおさえながら須山は言った。

「沢を抜けずにきたら、まだ半分も登れておらんですに」

運転手は追いついた二人の先に立って、すぐに歩きはじめていた。男の膝のとび出したズボンの先に見えているすっかりなめしのもどった乾いた短靴は固い木靴のようで、ふだんアクセルを踏んでいるその足はどこか機械人間のように山道の雑草を踏みつけていた。かすかにガソリンの匂いのするだぶだぶのサージの制服の上衣のポケットは無恰好に膨らみ、背中は座席の背に擦れてすっかり布地が光りはじめている。

「この辺には蝮はいませんか？」須山が言った。

「いますよ。でもあれは夏すぎがよくないでね。子をはらんだ雌が卵で膨らんだ腹を裏がえして苦しみながら、人が踏んでくれるのを待ってますじよ。そういうときに踏んだら、噛みつかれますわ」

ふりむいた運転手が夕闇に白い歯を見せて笑いながら言ったが、親切さと狡猾さがいり混った頬骨の張ったその顔は、かすかに蛙を思わせた。

「踏んでもらって、恩がえしに噛みつくわけ？」黙っていた映子が、急に陽気な弾んだ声で笑いながら言った。

「ただね、一年じゅう、いつでも蝮のでもところもありますわ、この山の奥の方にね。そこへは決していっちゃいけないんです……」

「この山の奥にあるの？」須山は訊いたが、運転手は返事をしなかった。なにかを警戒しているような気が、須山にはした。

「それより、わしらが子供のころは、この辺にも熊が出てきよったですわ。いま登ってきたところの笹の葉を食べにくるんです。だから熊笹というでね。でもあれも人間が悪いでね、山奥にはいって熊の食べる樹の実をとったり、山の草を刈ったりして追いたてるから、里に近いところにも餌を探して

出てきよるんでして。……そういう、人のはいっちゃんいけな山奥は、南洋にもありましたよ」

「南洋って……どこへ行ってたんですか？」

「ラバウルですよ」

「じゃ戦争中？」

「海兵団でね。内地がこんなやられてるなんてことは、戦争が終るまで、まるで知りませんでしたよ。二十年の九月にアメリカとオーストラリアの軍隊がやってくるまでね」

「米軍もあの島は跳び越して攻めてきたから、命が助かったわけね……」須山は戦死した父親のことをちらと思いだして言っていた。

「島じゅう要塞でね。あそこはちょうどこの辺に似た山があちこちにある島だったで、敵の飛行機がきて高射砲を撃つと、島の空が昼間でも真っ暗になるほどでしたよ。一時は千機ぐらいこっちの飛行機もいたし、戦争が終わったときもまだ二年分ぐらいの食糧が残ってたで……。あそこは地形がこのへんそっくりでね、さつま芋なんか内地の苗をもっていくと仰山とれたもんですわ。ただ、雨が降ると谷がみんな川になっちまう。ひどい雨でね。……わしらは山からパイプを海岸に通してね、敵がきたら湾を火の海にして防ぐ計画だったんですわ。……でもやっぱし現地人のスパイがいてね、敵さんもこちらの守りの固いのを知って、あの島には攻めてこなんだという話ですがな」それからかれは口調をかえて言いだした。「陸軍と海軍がおたがい同士、闇をやったりしてね。海軍はガソリンをたくさん持ってたが、食糧はなかったでな。反対に陸軍のほうは糧秣はあるがガソリンがないんで、貯めた食糧を闇をやったりかえっこしたりしてね……。わしもそれまで知らんじゃったが、陸軍と海軍じゃずいぶんちがうもんじゃで、陸軍は器材なんかひどく大事にしてね。武器でもトラックでも壊れると罰せられるんやが、海軍は消耗品として、使いすってわけでもないじょに、ある程度使えば壊れるものとして資材をとりかえるたてまえなんですわ……」



「滲みついた記憶をたどるように運転手はぼつりぼつりと語ると、須山に訊ねた。

「旦那は歴史のほうの御専門で？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「あつしも歴史は好きでね。あの城を見たいという人はめったにおらんじよに。それでも城を見たいとおっしゃるのは、やはりお好きでいなさるじよ？」

「そう言えば、街の案内図にもこの城は載ってないですね。駅のそばにある高原城のほうは駅前で売ってるどんな地図にも載ってるし、公園があったり、バスが通ったりしてるのに……」須山は曖昧に言った。自分がここへやってきた目的をこの運転手に言うわけにもいかないだらう。

「さっきくる途中、沢の底の方に沼があったけど、こんな山のなかに沼があるなんて、どういいうのかしらね」

「昔からある沼ですわ。この山にはあんなのが幾つもありますじよ。まだ上の方に、行っちゃあいけないことになってる沼もある……崇りがあるというんでね。なんでもこの城をつくった武士が水を貯めるのにつくったとも言出し、もっと古くからある溜池だという話もありますわ。あつしも城なんかできるもつと前の、相当昔からある池だと思ってます、だれがつくったにしてもね……」

「あの樹、なんていう樹かしら？」斜面に生え出している桜に似た雑木を指さして映子が言った。そのかたわらには、細かく別れた平滑な葉を持った杉に似た樹が空中に浮かべた葉をかすかに風で動かせていたが、東京ではあまり見ないあらぎの木だった。

「なんといいかね。このへんでは黒樺くわはと言ってますがな。黒桜ともいうんでしょうかな」

「その横にはあらぎの木もある。珍しいね。都会へもっていったら、みないいい材木や庭樹になるだらうな」須山はつぶやいた。

「あれはこの辺では一位と言いますわ。昔朝廷に献納したりして公家さんや神主さんの笏しやくをつくった